

中部の

エネルギーを 築いた

人々

本邦初の縦軸水車を導入した 今西 卓

豊橋電気の技師長であった今西卓は、明治45年、寒狭川に設けた長篠発電所に縦軸水車を全国に先駆けて導入し、注目を浴びた電気技術者である。大正10年に豊橋電気を離れてからは、東三河を中心に各種の事業を手がけ「東三の事業王」と呼ばれたが、昭和8年、49歳で没した。



今西
卓

長篠発電所で本邦初の縦軸水車を導入

今西卓は明治16年8月岐阜県揖斐郡池田村(現池田町)に、旧家の長男として生まれた。幼少より成績優秀で、第三高等学校を経て京都帝国大学電気工学科へと進んだ。明治41年7月に卒業後、当時大井川の電源を開発し東京地区への電力供給を目指していた日英共同のプロジェクト、日英水力電気への就職が内定していたが、日英の制度的違いもあって事業は設立せず、腰掛けのつもりで入っていた豊橋電気にそのまま留まることとなった。

豊橋電気では当時豊川の支流、寒狭川で水力開発を計画していたが、この建設が若き技師今西の手に委ねられた。寒狭川下流の渓谷に建設される長篠発電所(500kW、大正3年750kWに増設)は、洪水位が高く落差が十分にとれなかった。このため、今西は、大学時代の恩師青柳栄司の助言を得つつ、欧米で実用化されていたものの、大手電力会社もためらっていた縦軸水車を採用することとし、ドイツ・フォイト社製縦軸水車、シーメンス社製発電機の導入に踏切り、明治43年12月に起



長篠発電所



長篠発電所竣工記念碑

工し、明治45年3月に完成させた。発電所は期待通りの成績をあげ、今西の名は全国に知られるところとなった。発電所の傍らにたつ、「長篠発電所竣工記念碑」には、ナイヤガラ式水車(堅軸水車のこと)は「本邦ニテ本発電所ヲ以テ使用ノ嚆矢」と記し、その意義を強調している。

当時的高级技術者は1つのプロジェクトが終わると次の会社に移るのが通例であったが、今西はその後も豊橋電気に留まり、大正5年

支配人に昇進、タングステン電球を率先採用し、電気料金値下問題の解決に陣頭指揮をとり、また寒狭川筋に国産の堅軸水車を用いて布里・横川発電所の建設を進めた。大正10年4月、豊橋電気社長だった福沢桃介は、同じく社長を務めていた名古屋電灯との合併を計画し、事業の広域化をはかったが、「三河のことは三河で」と考えていた今西は、福沢と袂を分かち合併を機に辞任した。

東三の事業王



西渡発電所(水窪川水力電気)



今西卓の謝恩碑

豊橋電気を辞任して以降、今西は東三河を基盤に各種事業を手がけ、「東三の電気王」と呼ばれるようになった。今西が専務取締役となって事業を進めた会社が4つある。1つは大正13年1月開業した豊橋・田原間を結ぶ渥美電気鉄道、2つは渥美半島に電気供給を行っていた渥美電気・福江電灯を譲受した豊橋電気信託(大正11年11月譲受、後に

豊橋電気と改称)、3つは天竜川支流の水窪川に西渡発電所(2400kW)を建設し、岡崎電灯等に卸供給した水窪川水力電気(昭和3年2月運転開始)、4つは豊橋市内の電車事業を運営する豊橋電気軌道(大正14年7月開業)である。今西はこの他、三河セメント、三州自動車、遠州電鉄、三信鉄道、中部電力(岡崎)、三河水力電気などの役員にもなり、技術者ながら卓越した経営手腕を発揮し東三河の発展に貢献したが、昭和8年4月、49歳の若さで逝去した。豊橋市内浄円寺には、没後一周忌の昭和9年、関係した会社の従業員の手で建立された「謝恩碑」が残っている。

(浅野伸一)